（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　髙田　梓

本論文『クラハトとアジア — ドイツ語圏作家クリスティアン・クラハトの詩学—』は、スイス出身の現代作家クラハトの主要作品の研究である。表題にあるように、髙田氏はクラハトの作品を「アジア」という新たな視点から捉え直すことを試みている。「越境」や「旅」への着眼は現代文学研究において定番となっているが、クラハトの旅は未知なものへの憧憬や故郷探しではない。そうしたロマン主義はむしろ戯画的に描かれ、19 世紀末〜20 世紀のドイツの東アジア・太平洋植民地政策とその暗部や、社会的荒廃の代償行為としての異郷ツーリズム、グローバルな金融・情報資本主義の下で西欧のエキゾチシズムに阿るような擬態に走るアジアの姿などへの批判的示唆がその語りに浸潤する。こうした特性を作品群から摘出することにより、本論文は「消費社会論」、「オリエンタリズム」、「ポストコロニアリズム」、「太平洋をめぐる言説」といった、今日的テーマに対する寄与となっている。また、敢えて誇張されたステレオタイプを恃むなど時に風刺的で、時にアイロニカルに突き放すようなクラハトの表現にも着目し、作家固有の挑発の「詩学」を考察し、文学研究としての深度を得ている。第一部では、文献資料からクラハトの来歴を明らかにしつつ、生育環境、英語圏文化の経験や、1990 年代にいわゆる「ポップ文学」の旗手として世に出る以前のジャーナリスト活動などと、作家としての特徴形成との関係を論じている。作家自身と見紛うような人物をクラハトは作中にしばしば登場させるので、こうした作品外的考察にも作品論を補う意義を認めることができる。また、一見浮薄な風俗を描いているかのような作品の中核に潜む、歴史や社会に対する問題意識を看取するために必要な予備的作業として、第二部、第三部における具体的な作品論への架橋となっている。それぞれ重大な時代を背景としたアジア諸国や植民地を舞台とした各作品の分析と考察から髙田氏は、史実と虚構を綯い交ぜにした歴史（改変）小説的な結構が徐々に前景化していることを指摘する。また、クラハトの映画・映像美学に対する関心の高さと彼自身の詩学との関係を素描的に論じており、この点に今後の議論の展開が期待される。口頭試問において髙田氏は、審査委員からの様々な質疑に対して誠実に答え、疑問点の多くは解決された。どこまでも西欧的概念である「アジア」の理解がやや素朴である点、「キャンプ」、「間テクスト性」といった芸術・文芸概念の咀嚼が十分とはいえない点、テクストの「挑発」作用と読者の受容の関係が明瞭さを欠いている点など、残された課題はあるが、日本における初の本格的なクラハト論としての評価を打ち消すものではない。よって、本委員会は全員一致で、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断する。